

同名性と類似性

——プラトン『パルメニデス』からの解明——

納富 信留

1. はじめに

プラトンの対話篇『パルメニデス』は、内容等により中期から後期に至る過渡期に置かれるが、その評価は古代から大きく割れており、今日も読解の方向は定まっていない。本論文はそれを、後期プラトンのイデア論再考のプロジェクトに位置づけ、「類似（ὁμοιον）」という概念に着目して検討を加える。

まず、初期ギリシア哲学、特にエレア派が問題の背景にあると考え、プラトンが彼らの議論を批判し、「類似」と「同じ（ταυτό）」を初めて明確に区別したことを示す。この対話篇が、老パルメニデスと彼の弟子ゼノンがアテナイを訪問して若いソクラテスと対話するという設定であることは重要である。これは、『テアイテトス』で予告され『ソフィスト』で遂行されるパルメニデス哲学の徹底した吟味につながるからである。

次に、中期対話篇で提示された超越イデアの理論において、イデアと感覚物との関係が「類似」と「同名（ὁμώνυμον）」によって説明されていた点が、『パルメニデス』の一つの焦点となっていることを示す。「同一」と「類似」の概念は、イデアを導入するにあたり重要な役割を果たしていた。とりわけ「類似」はイデアと感覚物の関係として登場していたが、その「類似」自体にイデアを立てる発想の困難が『パルメニデス』で示されている。これ以後は、イデアと感覚物との関係を、モデル（model）と模像（copy）の関係で表す方向に進む。

こうして、「類似」の概念をどう捉えるかがイデア論の鍵となる。それは「同じ名で呼ぶ」という事態をどう捉えるかをめぐって、後に学園アカデメイアでスペウシポスやアリストテレスが徹底して考察する論理的な問題に発展する。プラトンが「類似」に関する困難にどう対処したかが、ギリシア哲学史の大きな問題として浮かび上がる。

2. 『パルメニデス』における超越性のジレンマ

新しい考えを提示することと、それを擁護することは別である。何かの経験をしてそれを正しく言語化することは、経験すること自体とは異なる。言説 (logos) によって説明できない者は真の経験を欠いており、さらなる訓練を必要とする。

プラトンが『パルメニデス』でいくつかの理論的困難に取り組むとき、検討されるのは、彼自身がいわゆる中期対話篇で提示した「超越イデア論 (theory of transcendent Forms)」であった⁽¹⁾。四つの中期対話篇、すなわち『饗宴』『パイドン』『ポリテΙΑ』『パイドロス』(私はこの順に書かれ、読まれるべきだと考える)のうち、『パルメニデス』が批判的に検討する主な対象は『パイドン』であった。ソクラテスによるイデアの提案と、パルメニデスが「離在 (χωρίς) と分有 (μετέχειν)」でまとめたその要約 (128e5–129b1, 130b2–5) は、『パイドン』のイデア論を強く想起させるからである。

『パイドン』が到達した地点から始めよう⁽²⁾。そこでは二種類の「離在」が論じられている。魂の身体からの離在と、イデアの感覚物からの離在である。これから二つの相関する側面で超越の経験が現れる。魂は死に向けて浄化され、可能な限り身体から切り離されることで、真の実在——すなわちイデア——が私たちの認識に対応して現れる。離在はこの意味で超越性を特徴づける。混雑したこの世界の経験から分離された後、感覚物はイデアを分有することでそのありようを示す⁽³⁾。

ここに『パルメニデス』が提起するジレンマがある。もしイデアがそれ自体で、私たちの感覚的世界(以下、感覚界)から分離して存在するなら、次のどちらの角を取っても不合理に陥る。

〔第1の角：隔離〕イデアと感覚物が、分離によってまったく別の次元に置かれ、どんな関係や通約性ももたないとしたら、互いに完全な他者となり、互いにとって無である。

〔第2の角：還元〕イデアと感覚的事物が分有のような何らかの関係を持つと

1 Notomi 2006 参照。

2 Notomi 2018 参照。

3 『パイドン』100d では「分有 μέθεξις、共有 κοινωνία、臨在 παρουσία」といった多様な用語が示唆される。

したら、両者は結局同じ次元に置かれる。それがどのような関係であれ、超越性は不可能となる。

『パルメニデス』第一部は感覚的事物（以下、感覚物）のアイデアへの分有という考えに対して、五つの批判を加える。最初の四つの批判は第二の角（すなわち同一次元への還元）から生じるものであり、アイデアと感覚物を基本的に同種として扱うことで生じる困難を提示する。これに対して第五の批判（133a-134e）は第一の角（完全な隔離）から生ずる重大な困難を明らかにする。ジレンマによる批判はエレア派、特にゼノンが開発した手法である。プラトンのエレア派への反応は後期対話篇において重要な意義を持つ。

他方で、アイデア論のもう一方の軸である「魂の超越経験」が、ここで完全に無視されていることに注意しなければならない。魂は『パイドン』ではアイデアと対で論じられ、『ポリテΙΑ』『パイドロス』でも両者は結び付けられているが、『パルメニデス』で「魂」は二度しか言及されない⁴。議論のこの一面的性格は、後にアリストテレスが加えるアイデア論批判にも見られる一般的特徴をなす。私は、プラトンにとって、まずアイデアと感覚物との関係を再検討することが、魂の超越性という対の可能性を確保するために必要であったと考える。もしこの見方が正しければ、アイデア論のいかなる理論的検討も、魂を浄化するための重要な実践であることになる。

3. 類似性の導入

アイデア論の鍵として「類似（ὁμοιον）」を検討するが、まず問題の背景を考察したい。『パルメニデス』で焦点となる「類似」の他に、関連語として「同名性（ὁμώνυμον）」も重要な役割を果たす。形容詞 ὁμοιος (similar) は一般に「似ている、類似する」を意味し、似ている二者は対称的であるが、ἔοικα (be like) や εἰκών (likeness) はしばしば非対称的に用いられる。

アイデア論において、感覚物はアイデアと ὁμώνυμα（同名の物）であると特徴づけられる。『パイドン』(78e) では「アイデアの ὁμώνυμα を持つ全てのもの」として感覚物が記述される。例えば、美のアイデアと同じ名を有する事物は「美しい」と呼ば

4 “ψυχή” という語は 132a7, b5 の 2 箇所でのみ使われている。

れる。『ティマイオス』も感覚的で滅びゆくものを「アイデアに対して ὁμώνυμον であり、かつそのアイデアに類似 (ὅμοιον) しているもの」と記す (52a)。この特徴は『パルメニデス』第一部の第五批判にも現れる。パルメニデスはアイデアと感覚物の関係を、次のように定式化する。

私たちがそれ〔アイデア〕を分有することで各々であると名を付すものの類似物 (ὁμοιώματα) であろうと⁽⁵⁾、あるいは、それらをどのような仕方立てようとも。他方で、これら私たちのもとにあるものは、かのものどもの同名物 (ὁμώνυμα) であるのだが、今度はそれ自体との関係であり、形相との関係であるのではない。つまり、そのように呼ばれるもの (感覚物) はかのものものではなく、それ自体のものなのだ。(133d)

この箇所は『パイドン』の議論を想起させる。感覚物はアイデアとの間に類似という関係にあり、同じ名を持つ。「同名物 ὁμώνυμον である」という言語上の関係は、類似の関係を表す。

また、アイデアの存在論的並びに認識論的優位は、『パイドン』では「派生名 ἐπώνυμον」の概念で表される⁽⁶⁾。これは『パルメニデス』130e で再現される。「なにかアイデアがあり⁽⁷⁾、それに与る (分取) ことでこれら他のものはその形相の派生名 (ἐπωνυμίας) を持つ」と語られる。

興味深いのは、『パルメニデス』が ὁμώνυμον という語を一見哲学に無関係な文脈で用いている点である。まず、プラトンの異母弟アンティフォンが彼の祖父と同名 ὁμώνυμον であることが語られる (126c)。この言及はもう一つの同名性を暗示している可能性がある。すなわち、ソクラテスと同時代の弁論家でソフィストであったアンティフォンである。プラトンはこの重要なアテナイ人を『メネクセノス』(236a) の一箇所を除いて対話篇で完全に無視している。さらに、アデイマントスとグラウコンのところを訪ねた人物の名前ケファロスは、『ポリテイア』の対話の舞台となったペイライエウスの邸の老主人と同名であり、彼の祖国とされるクラ

5 133d1 の関係代名詞 “ὃν” が何を受けるかについて、二つの解釈があり拮抗している。「私たちの元のもの」を先行詞とする場合は、130e5-6 とパラレルになるが、訳者は「類似物」がそれに与る「アイデア」を受けると解する。

6 『パイドン』92d9, 102b2, c10, 103b7, b8.

7 前に認められた範囲で、という意味。

ゾメナイは自然哲学者アナクサゴラスの名と結びついたイオニアの主要ポリスであった⁽⁸⁾。同名性は人名や地名の連想を通じて『パルメニデス』を『ポリテイア』の文脈や自然哲学者にも結びつけている。加えて、同名 (ὁμώνυμον) は『パルメニデス』第二部でパルメニデスに答える対話相手アリストテレスに適用されるかもしれない。この人物は年代設定からは、学園アカデメイアでのプラトンの弟子ではなく、前 404-403 年に三十人政権に加わった政治家を指している。ほとんどの注釈者は、アリストテレスという名の人物に聞き手の役割を与えたことは偶然であり、ここに同名性があるという見方を退けている。プラトンがこの対話篇を執筆したのは、第二回のシチリア行き（前 367 年）以前で、その時点でアリストテレスはまだマケドニアにいて学園アカデメイアに入門していなかったからである。しかし、プラトンが後に登場人物の設定を変えて名前だけ付け替えたことは十分にありえる。

ここでいくつか歴史的な論点を挙げておく。ギリシア語の ὅμοιον は「類似」と「同じ」の両方を意味しうするため⁽⁹⁾、初期ギリシア哲学者、とくにエレア派の哲学者たちはこの語を「同じ」の意味で用いることが多かった。パルメニデスの詩においては、ὅμοιον と ταὐτόν はほとんど区別なく用いられ⁽¹⁰⁾、メリッソスやゼノンでも同様である⁽¹¹⁾。

これに対して、プラトンはイデア論においてこれらの語を慎重に区別する。とりわけ「同じ」の概念は、イデアの導入において決定的な役割を果たす。すなわち、イデアは多くの感覚的事物において「同一の形」を捉えることによって把握されるとされるのである。ディオティマはソクラテスに「すべての肉体における美を一つで、同じのもの (ἐν τε καὶ ταὐτόν) と見なさないのはまったく狂気である」（『饗宴』210b）と語る。初期対話篇でも同様の表現が使われる。ソクラテスは「徳とは何か」をめぐる問いの対象は「一つの同じ形 (ἐν τι εἶδος ταὐτόν) である」と示唆する（『メノン』72c）。また、このことは、「同じものがすべての上にある (ταὐτόν

8 この同名性は Scolnicov (2003, 44) によって指摘されている。プロクロス『プラトン『パルメニデス』注解』660.30 以降も参照。スコルニコフは 142e-143a をアナクサゴラスとこの箇所と結びつけている (101)。

9 Cf. LSJ, I.1 and 2.

10 DK 28, τ'αὐτόν, B3, 6.8-9, 8.29, 34; ὅμοιον, B8.22.

11 メリッソスについては、DK 30 B7(1) = LM MEL. D10、及び、擬アリストテレス『メリッソス、クセノファネス、ゴルギアス』974a12、シンプリキオス『アリストテレス『自然学』注解』103.30-33 参照。ゼノンについては、シンプリキオス『アリストテレス『自然学』注解』141, 5 = DK 29 B1 = LM ZEN. D6 参照。

ἐπὶ πᾶσιν)」(75a) という表現でも示される⁽¹²⁾。『ラケス』では、勇気はあらゆる場合で「同じ (ἐν πᾶσι τούτοις ταὐτόν)」(191e) であり、『エウテュフロン』では、敬虔はすべての敬虔な行為において「同じ (ταὐτόν)」であり、「一つの形を持つ (μίαν τινὰ ἰδέαν)」(5d) とされる。こうして、多くの事例はアイデアを基準にして同一である。

同一性の概念にはアイデア自体の自己同一性が含まれ、それぞれのアイデアがその反対のアイデアに対立することが帰結する（『エウテュフロン』7a）⁽¹³⁾。先行する哲学者たちとは異なり、プラトンは「同じ」と「類似」をこのように明瞭に区別して、アイデア論に用いたのである。

4. ゼノンの逆説

重要なのは、ゼノンが第一仮説の第一論証において初めて「類似」の概念を導入したということである。ゼノンは感覚物の間の「類似性」を論じる。彼は次のように述べる。

もしあるものども (τὰ ὄντα) が多であつたら、その場合それらは似ていてかつ似ていないことになるのですが、このことは不可能です。というのは、似ているものが似ていないことも、似ていないものが似ていることも、あり得ないからです。……もし似ていないものが似ていたり、似ているものが似ていないことが不可能であれば、多であることも不可能になりますね。というのは、もし仮に多であるとしたら、不可能なことを被るからです。(127e)

背理法によって、ゼノンは「多である」可能性を否定する。

この議論は未発表の書き物から読み上げられたものである。これがゼノン自身の著作からの引用か、プラトンによる創作かは不明である。『パイドロス』ではゼノンの弁論術が「エレアのパラメデス」の名で暗示され、「類似と非類似 (ὅμοια καὶ

12 蜂は色々な種類がいるにしても、蜂として「同じ (ταὐτόν)」である（『メノン』72c）。また、健康も「同じ」(72d-e) であり、強さも「強さ」という形において「同じ」とされる (72e)。

13 対照的に、ある事物の保存や連続性は、絶対的な「同じ」ではなく、それと似た種類の何か新しいものをその都度残すことでもたらされる（『饗宴』208a-b）。

ἀνόμοια)」の対を「一と多、静止と運動」とともに用いる者とされる (261d)。これら三つの対は、『パルメニデス』129d-e でソクラテスが挙げる六つのアイデアに対応する。

ゼノンの議論は文脈がないため多義的に解釈されるが、対象が多であることの否定と解釈する限り、次のように理解すべきであろう。

A は大きく、B は大きい、ゆえにそれらは似ている。しかし A は重く、B は軽い、ゆえにそれらは似ていない。つまり同じ A と B が同時に似ていて似ていないことになるが、それは不可能である。

もしそうであれば、「似ている」は通常の述語ではなく「大きい、小さい、重い、軽い」といった述語について語られる第二階の述語である⁽¹⁴⁾。

この議論に対してソクラテスは、「類似のアイデア」と「非類似のアイデア」を立てれば A と B が類似であり非類似であることを問題なく説明できると提案する (128e-129b)。彼らは (例えば大きさに関して) 類似のアイデアを分有し、(例えば重さに関して) 非類似のアイデアを分有する。ソクラテスはこのように「類似のアイデア」(129a-b, d-e, 130b, 131a) を導入することで、ゼノンの困難を解決しようとしたのである。

注釈者たちはこのアイデアの導入を一般的なものと取り、「類似」以外の任意の述語にも適用されると解するが、私は「類似のアイデア」は特殊なもので、プラトンの理論に深刻な困難をもたらすと考える。言い換えれば、類似のアイデアの導入は、ゼノンの逆説に対する誤った解決策である。

5. 類似の無限後退

次に、第一部の第四批判 (132c-133a) を検討し、類似が無限後退を生じさせる仕方明らかにする。この論証では類似の概念はゼノンの用法とは異なり、アイデアと感覚物との関係 (すなわちモデルと模像の関係) に用いられている。

この論証はかつては、第二批判で出された「第三人間論」の亜種として扱われ、

14 別の可能な再構成は次の通りである。「A は B に似ているが、C に似ていない。」これは「ソクラテスはパイドンより小さいが、シミアスより大きい」という『パイドン』の例に似ている。だが、私はこの議論では重要な論点が見失われていると考える。

ヴラストスらにより「第三人間論の第二版」と呼ばれたが、私はマルコム・スコフィールドの提案に従ってその解釈を退ける。これは、「大きい」を使った無限後退の議論とは異なり、アイデア一般を対象とするのではない。そうではなく、「類似のアイデア」⁽¹⁵⁾に関する無限後退である。この読みには三つの主な利点がある。

(1) ギリシア語本文の意味がより良く通る。特に εἶδους (132e1) の写本上の読みを削除する必要はなく、語「分有する (μετέχειν)」は 132e1 において通常の意味で理解できる。

(2) パルメニデスの結語が適切に理解できる。「それでは、他のものが形相を分取するのは類似性によってではなく、なにか別の、それによって与るものを探し求めるべきなのだ」(133a5-6)⁽¹⁶⁾。

(3) 全体の議論が独立した批判に寄与し、単に第三人間論 (TMA) の反復にとどまらない。

この論証では、ソクラテスはアイデアをモデル (παράδειγματα) として説明し、他のものはそれに類似するもの (ὁμοιώματα) となるがゆえに、分有とは模倣に他ならないと提案する (132d1-4)⁽¹⁷⁾。しかし、モデルとその模倣が類似の関係にある限り、それらの関係は対称的に扱われてしまうのである (132d5-8)。

モデルと模倣という形で分有の説明において、「類似」という概念はアイデアと感覚物の関係を表す決定的な役割を果たしている。議論は次の通りである。

模倣 (感覚物) はモデル (アイデア) に似ている。それゆえ、両者は類似のアイデアを分有している。だが、その分有が類似の関係であるので、さらに別の類似のアイデアを分有していることになる。そうして、無限後退が生じる。

こうして、「類似」という概念が問題の焦点となるのである⁽¹⁸⁾。

6. 類似の定義

15 Schofield 1996 は “Form of Likeness” と呼ぶ。

16 Gill (1996, 44-45) 参照。

17 Schofield (1996) は、この提案はソクラテスの側ではパルメニデスとの対話を通じて確かな達成だと強調している。私も『パイドン』の想起説 (74e 等) がすでに感覚物のアイデアへの類似性を議論に使っていることを付け加えたい。

18 第五批判が感覚物のアイデアへの関係を「同名 ὁμώνυμα」(133d) としている。

『パルメニデス』第二部では、「類似」は「一者 (τὸ ἓν)」をめぐる検討で基本的な特徴の一つとして論じられる。八つの仮説の各々が「類似と非類似」を論じるが⁽¹⁹⁾、その最初で、類似は「なんらか同じである状態にあるもの (ταυτόν που πεπονθός)」(139e) と説明される。私はこれを類似の定義と解する。

注目すべきは、ここでは類似がもはや独立した基本概念ではなく、「同じ」から派生する従属概念と見なされていることである。また、πεπονθός / πάθος という表現は、あるものによって受動的に影響を受けた状態を示す。類似するものは、何か同じものがそれらに作用したために存在する。すると、感覚物とイデアの関係は以下ようになる。

多くの感覚物がFである、つまり、ある性質Fを持つ。その点でFのイデアに似ているとすれば、それらは同じFを共有し、それらはFのイデアの作用を受けた状態にある。

こうした「類似」一般の説明はイデア論の基本によく合致し、感覚物が同じ名を持つことをイデアに由来する事態として説明する。なぜなら、イデアは自己同一であり、感覚物が被る「同じ」の原因だからである⁽²⁰⁾。

他方で、私は、FのイデアとFの事物の上位にさらに類似のイデアがあるとは考えない。もしFの事物がFのイデアを分有することによって互いに似るのであれば、それは類似のイデアを分有するからではない。この分析が正しいとしたら、ソクラテスが最初に提案した「類似のイデア」129a4-6 という考えは、不適切か誤りということになる。類似するものは同じ名を持ち、同じ性質を共有する。アリストテレスは後に、この関係を「同名同義 συνώνυμα」と呼んでいる。

では、次に来る疑問は、プラトンが「類似のイデア」という考えを放棄したかどうか、である。私の答えは「イエス」である。なぜなら、類似のイデアはこれ以後の対話篇、特に『ソフィスト』にはもはや登場しないからである⁽²¹⁾。ただし、もし

19 定理 I.8* (139e-140b), 定理 II.8* (147c-148d), 定理 III.8* (158e-159a), 定理 IV.8 (159e-160a), 定理 V.8 (161a-c), 定理 VI.8 (164a), 定理 VII.8* (165c-d), 定理 VIII.8 (166b): アスタリスクはその議論が「類似」の定義を用いている箇所を示す。

20 スコフィールドによる最初の可能な反論への応答は説得的ではない(73-75)。

21 例外として『テアイテトス』186aが挙げられるかもしれないが、これはイデアのリストではない。Schofield (1996) も、プラトン主義には類似性の範型イデアは必要ないと示唆している。

類似のアイデアという提案を放棄すれば、第一部の第四批判はそのままの形では生じなくなるが、これが無限後退の困難を完全に解決するとは限らない。二点について考慮が必要である。

（１）アイデアと感覚物が依然としてモデルと模像の関係で扱われる場合、それらの関係は「類似」が持つ対称的关系を必然的に含むことになるのではないか。その含意を否定する様々な試みがあるが、私はこの問題の回避は難しいと考えている⁽²²⁾。

（２）たとえ類似のアイデアを排除しても、モデルと模像という説明において「第三人間論」のようなアイデアの無限後退は依然として避けられない可能性がある。つまり、もしモデルと模像の両方がFと呼ばれるなら、それらの上に第三のF（アイデアF）を立てることが可能である。類似のアイデアの無限後退を認めなくても、この種の議論はモデルと模像に適用できる。したがって、第二部での「類似」の定義は、第一部の第四批判にある特定の困難を解決するかもしれないが、モデルと模像の説明自体は、なお論理的な検討を要する。

7. 同名性と同義性

アイデア論を批判的に検討するにあたり、アリストテレスはアイデアと感覚物の意味上の関係に注目した。『カテゴリー論』第一章で彼は *ὁμώνυμα* を「同一の名を持つが本質の定義を共有しないもの」と定義し、*συνώνυμα* を「同一の名を持ち、かつ同一の本質の定義を共有するもの」と定義する（1a1-12）。これらは「同名異義」と「同名同義」という術語でその後の言語論に受け継がれる。前者はプラトンに由来し、後者はプラトンの対話篇には現れないが、アカデメイアでスペウシッポスによって導入された新語である⁽²³⁾。この区別は、少なくとも部分的には、アイデアと感覚物の関係を明確にし、かつそれに対する批判として機能することを目的に導入された⁽²⁴⁾。プラトンのアイデア論はこれら二つの概念によって、以下のように表わされる。

プラトンは、多くの *συνώνυμα*（同一の定義を共有する感覚物）が分有によつ

22 Schofield (1996, 66-68) 参照。

23 スペウシッポス断片 68a-c Tarán。

24 Ward (2008, 26-42) 参照。

てイデアに ὁμώνυμα である、と考えた⁽²⁵⁾。

この区別に基づき、アリストテレスはプラトンのイデアと感覚物の関係を ὁμώνυμα (同名異義) という概念で批判するになる。つまり、両者は名のみを共有するが本質は異なっている、と見なしたのである。「同名異義」は多義性の誤謬をもたらすものであり、強く言えば「はし (橋、箸、端)」の関係にあたる。実際、アリストテレスは失われた論考『イデアについて (Peri Ideōn)』でプラトンの理論を批判するにあたり、ὁμώνυμα に注目した。この理解では、原因と結果は συνώνυμα でなければならない⁽²⁶⁾、という『形而上学』Λ 卷第 3 章の議論は、プラトンが『パイドン』でイデアが感覚物と ὁμώνυμα と呼んだ因果理論に対する厳しい批判となるのである。

しかし、ὁμώνυμα と συνώνυμα の区別は、プラトンを論じるには必ずしも望ましいものとは言えない。プラトンとアリストテレスへの古代の注釈はこれらの用語でイデア論を記述することの困難を明らかにしている⁽²⁷⁾。アリストテレス自身も「あるもの (τὸ ὄν)」の異なる意味を分類し、それらを実有 (ウーシアー) に関係づけようとする、いわゆる「焦点的意味 (focal meaning)」の提案で、同様の困難に直面する。それらは συνώνυμα でも ὁμώνυμα でもないからである。

8. 結論

要約すると、第一に『パルメニデス』がイデアと感覚物の関係をモデルと模像として検討するとき、最終的に「分有」の説明から「類似のイデア」を排除する選択を行っていた。私たちは『ソフィスト』の五つの最大類の議論において、プラトンが類似と非類似の代わりに同一性と差異、すなわち分離と結合の原理を議論していることを見出す。

25 アリストテレス『形而上学』A6, 987b9–10: κατὰ μέθεξιν γὰρ εἶναι τὰ πολλὰ τῶν συνωνύμων ὁμώνυμα τοῖς εἶδεσιν. このテキストは校訂者によって様々に論じられてきたが、私は α 系統の写本の読みを維持して理解する。もしそれが正しければ、アリストテレスはこの一文で二つの術語をイデアと感覚物の関係について用いていることになる。納富 2025、第 20 章参照。

26 アリストテレス『形而上学』Λ 3, 1070a4–5: ἐκάστη ἐκ συνωνύμου γίνεται οὐσία.

27 アフロディシアスのアレクサンドロス『アリストテレス『形而上学』注解』51.11–13、及び、アスクレピオス『アリストテレス『形而上学』注解』46.20–22 参照。

第二に、『パルメニデス』第二部における「類似」の定義は、「類似」を「同じ」の派生態あるいは従属物として扱っているが、それでもモデルと模像の説明を確かなものにするためには、さらなる精緻化が必要である。なお、「分有（μέθεξις）」の概念は、後期対話篇では類や形相（イデア）間の関係にも適用される。

最後に、アリストテレスがプラトンに対して ὁμώνυμα と συνώνυμα の区別で行った批判は、アリストテレス自身の哲学にさらなる困難を残した。同名性と類似性は依然として重要な哲学的問題であり続けたのである⁽²⁸⁾。

参考文献

- Gill, M. L. & Ryan, P. 1996. *Plato, Parmenides*, Hackett.
- Notomi, N. 2006. "Plato's Metaphysics and Dialectic." In *A Companion to Ancient Philosophy*, edited by M. L. Gill & P. Pellegrin, Blackwell, 192–211.
- Notomi, N. 2018. "The Soul and Forms in Plato's *Phaedo*." In *Plato's Phaedo: Selected Papers from the Eleventh Symposium Platonicum*, edited by G. Cornelli, T. M. Robinson, & F. Bravo, Academia Verlag, 288–293.
- Notomi, N. 2022. "Homonymy and Similarity in Plato's *Parmenides*." In *Plato's Parmenides: Selected Papers of the Twelfth Symposium Platonicum*, edited by L. Brisson, A. Macé, and O. Renaut, Academia Verlag, 211–219.
- 納富信留 2025. 『哲学の言葉を聴く—西洋古典哲学研究—』、東京大学出版会.
- Schofield, M. 1996. "Likeness and Likenesses in the *Parmenides*." In *Form and Argument in Late Plato*, edited by C. Gill & M. M. McCabe, Oxford University Press, 49–77.
- Scolnicov, S. 2003. *Plato's Parmenides*, University of California Press.
- Ward, J. K. 2008. *Aristotle on Homonymy: Dialectic and Science*, Cambridge University Press.

28 本論文は、2019年7月18日にフランス・パリで開催された国際プラトン学会主催の第12回プラトン・シンポジウム（テーマ：プラトン『パルメニデス』）での発表を改訂した大会論文集掲載 Notomi 2022 の日本語訳に、若干の補足を加えたものである。